
銀魂 —the Gunner in reds—

YunlCa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 — the Gunner in reds —

【Nコード】

N5463F

【作者名】

Yunica

【あらすじ】

悲劇の子、氷野・百（ひの・もも）は安らかな死を決意した。だが、彼に与えられたのは望む死ではなく、定春のかみつき攻撃だった！？・銀魂メンバーとオリジナルキャラクター百が江戸で大暴れ！・何故、百は悲劇の子なのか・百は一体何のために生まれたのか・「この命はあつてはならなかった」・「どうか僕二意味を」・「殺す！僕ヲ創り出しタ貴様ヲ」・「きゃハはハハはハ！」・幾多の謎と思惑が交錯し物語は紡ぎ出される——！

P r o l o g u e (前書き)

この小説は【銀魂】の二次創作です。

主人公は男のオリジナルキャラクターです。

原作のエピソードは殆ど無視しておりますのでご了承ください。

P r O l o g u e

嗚呼、冷たい。

この冷たい雪にさえ僕は隠されてしまうんですね。

ならば白き雪よ、どうか、どうか。

僕を優しく包んで下さい。

そのまま春を共に待ちましょう。

やがて暖かな日差しに身を焦がし、共に溶けてゆきましょう。

冬になれば、僕は白く冷たい塊となって地に降りましょう。

そして、悲しみに手を差し伸べましょう。

望みなのです。

それが、僕の精一杯の望みなのです。

どうか。

この意味の無い命に至福の最期を与えてください。

意味無しの最期のワガママをどうかお聞きください。

嗚呼、暖かい。

やっと。

やっと、僕は。

逝けるのですね。

行く当ても無く彷徨うのはもう疲れしました。

やっと、

消

え

れる
。

P r o l o g u e (後書き)

ずっと書きたかったものなので書いて嬉しいです。
初心者なので、
アドバイスなどあればどんどん言ってください。

Chapter 1 (前書き)

ああ、僕はやっと消えるんだ……。

次、目覚めたとき、僕を迎えるのは天国という花畑なのだろう……。

Chapter 1

——わんつ。わんわんわんつ。……がぶつ

犬が何度も吠えている、と思っていると、突如として頭に激痛が走った。

「痛い痛い痛い痛い！！」

大声で悲鳴を上げる。

こんな情けない声を出したのはいつ以来だろう。頬を伝う血を手で拭いて見て確信する。

僕は無様にも犬に噛まれたのだ。

何をするんだ、と思わず犬を睨みつける……が。

「でっ、でかあっ」

愛しいながらも巨体を持つ白い犬——悪魔がそこに居た。頭の痛みも忘れ、抜けた腰に鞭打ち後ずさりした。

「ん？ 定春どうしたアルか？」

やがて、幼い橙の髪の少女が歩み寄ってきた。

ああ、この白い悪魔は定春と言うのか、と思いながらその場を去ろうとする……が恐怖で立ち上がることもままならない。

「定春、ヨソの人は噛んじゃダメって言ったアルヨ。そこのお前！
噛んだりして悪かった、ごめんちゃいって定春言ってるアル」

といって、彼女は小さく頭を下げた。

定春と呼ばれる白い悪魔（クドイだろうが、コイツは悪魔なのだ
僕は確信している）を少し申し訳なさそうに首を垂れていた。

「あ、いや。大丈夫。大丈夫です」

震える手を左右に振り、取り敢えず何でもない風を振舞う。

その間もドクドクと絶えることなく流れる鮮血が僕の身体を濡らす。
それはもう、あれ、僕の身体の中にこんなに血あったのってぐらい
流れているのだ。

——ヤバいんじゃない？

その自問に答えることも出来ぬまま僕の意識は薄れ行く。

「だっ、大丈夫アルか！？ 定春、交尾はしても殺人は駄目って銀
ちゃん言ってたアルヨっ、どうしたらいいネっ？ 新八っ！ 新八
っっ！」

ぼっ、僕の名前は新八じゃあり……ま……せん。

Chapter 2 (前書き)

白き悪魔、定春くんに噛まれた僕は意識を失った。
薄れ行く意識の中、少女の声が聞こえる。

「新八、新八！」

ってアレ？

Chapter 2

薄暗い視界が途端に明るくなる。

……新八っ

先程そう叫んでいた、橙髪の少女が少し心配そうに覗き込んでいた。

「だからっ！！ 僕は断じて新八じゃありませんっ！」

「知ってるネ。何言ってるアルか」

何度もそう呼ばれていた気がした。

だから、否定する為に大声で叫んでみた……のだが。

「ていうか、何で新八を否定するんだよ、『断じて』って……。」

万が一の可能性だってあるでしょ！」

「うるさいネ、メガネ。誰だって新八は嫌ネ」

「何だよ、それ！ 助けてやったのに恩を仇で返されちゃったよ！」

メガネと呼ばれた少年が何やかんやと喚いている。

……何故だろう？

というか、誰？

ここ、何処ですか。

「大丈夫ですか？ って、大丈夫なワケないですよ、定春にサックリいかれちゃってましたから。神楽ちゃん、どうするんですか。ばれたら銀さんに怒られますよ。定春、捨てられますよ」

メガネ少年（面倒なので略する）が、呆れた顔をしながら橙の髪の

少女……神楽ちゃんと呼んだ少女を睨んだ。

「それは嫌アル。それに、こいつも、死んではいないネ。ネ？」

神楽ちゃんが、僕に賛同を求めた。

肯きたいところだが、何故か身体中に激痛が走り動かない。

「う……っ」

思わず声を上げてしまった。

メガネ少年が顔をしかめる。

どうやら、僕が満身創痍であることに気づいたらしい。
見かけによらず、勘が良いやつだ。

「ちょっと、神楽ちゃん。これ、マズイですよ」

「だ、大丈夫ネ。銀ちゃん、今日は帰り遅くなるって言ってたネ」

「でも、もうそろそろ帰ってくる頃ですよ」

といってチラリと恐らく時計の方に目を見やった。

釣られて、僕も視線を動かすが時計は見えなかった。

が、ここが、誰かの寝室だということ、肌の感触から包帯を巻かれ、
布団に寝かされていることに気づいた。

どうやら、この二人は僕を看病してくれているようだった。

途端に、申し訳なくなる。

「あの、メガネさん」

名を呼ぶにも、名前が分からないからとりあえず、神楽ちゃんが呼んでいたのを真似する。

「あ、新八です」

メガネさん……新八さんは苦笑しながら、答えた。
あ、この人が新八なのか。

さつき失礼なことを言ってしまったな、と少し反省してから、言い直す。

「新八さん、すみません。あの、お邪魔なようでしたら僕、そろそろ……」

「何言ってるんですか、そんな状態で……。立つこともままならないはずですよ」

彼の言うとおりだった。

今の僕は何ら気力も体力も無かった。

だが、これ以上彼らに迷惑をかけるのは情けない。

「ですが」

「駄目アル」

粘ってみたが、今度は神楽ちゃんに拒否された。

「私たち、手当てするときお前の身体見たネ。全身傷だらけだったアル」

「それは、定春くんのせいではないんですよ」

「でも、放ってなんておけないですよ」

「ですが、銀という方に怒られるのでしょうか？」

「それは……」

新八さんが言いよんどんでいると、神楽ちゃんが声を上げた。

「新八っ！」

新八さんは「どうしたの、神楽ちゃん」と言いつつ、神楽ちゃんの泳ぐ目の先を辿っていると、やがてその声も消えていった。

瞬間、二人が揃って罰の悪そうな顔をするのを僕は見逃さなかった。

「呼んだか？」

わいわいと馬鹿みたいに揉めている間に、その人は音も無くそこに佇んでいた。

生気を感じられない瞳は揺るぐことなく新八さんを見据えている。

刹那、その場の空気が戦慄と化した。

ああ、この人が《銀》なのだ、と確信した。

Chapter 3 (前書き)

——呼んだか？

その倦怠感に溢れる声は、何故か僕の痛む身体を癒してくれた気がした。

Chapter 3

「ぎっ、銀ちゃんっ…………お、おかえリアル…………」
「おう」

新八さんと神楽ちゃんが立ち上がって、彼の視界から僕を隠そうと布団の前に立ちふさがる。

二人の不自然な笑顔は見ていて痛々しかった。

「あっ…………えっ、とー。ご飯今から作るんで…………」

ささ、と新八が彼の身体を押す…………が細身に見えたその男はビクとも動かなかった。

「てめーら、何してやがる？」

「え…………と」

二人は顔を見合わせ、諦めの表情をしてみせた。
子供たち、僕の為にすまない…………。

神楽ちゃんが重い口を開いた。

二人は、白い悪魔こと定春くんの散歩中だったこと。

雪を掘って遊んでいた定春くんは埋もれていた僕を助け出そうと噛みついたこと。

僕の血が辺りの雪を赤く濡らしたこと。

記憶を失った僕を心配し二人で万事屋の寝室——即ちここに運び込んでくれたこと。

肌蹴た身体には無数の傷があったこと…………。

「私、心配だったアル。放っておけなかったアル。勝手に寝室使ったのはあやまるヨ」

銀髪の男は、溜息をつきながら神楽の頭に手を置いた。

「がきんちよ連れ込んでるから珍しいと思ったら、そんなことか。定春のことだから、噛み殺したんじゃないかと思ったが、生きてんならいいんじゃないの。今度よそ様噛んだら、餌減らすからな」

そう言つて、お腹のフサフサとした毛に僕の血をべっとりつけた定春くんをちらりと見る。

くうーんと鼻を鳴らした定春くんは心底反省しているようだった。

「おい、アンタ」

急に呼ばれたので、まさか自分のことだとは思わなくて少し惑った。

「え……あ、はい」

「しばらくは動けねえだろう、寝てるといい。ガキ共が世話するぞーだしよ」

「すみません……恩に着ます」

「俺は坂田銀時。……アンタ、名前何ていうんだ？」

自然な流れだったけど、僕は思わず口を噤んだ。

名前？ そうだ、僕の名前は何か？

困っていると、新八が変わりに答えた。

「氷野百ですよ、氷野さん。腰の銃に名前が書いてありました」
「おー、じゃあ、氷野。まあ、しばらくはヨロシクってコトで」

ということ、氷野百^{ひのもも}こと僕は万事屋と呼ばれる謎の集団のアジトに居候することとなった。

「本当にありがとうございます……」

有難い限りです。

CHAPTER 4 (前書き)

そして、氷野は眠るように死んだアル。

——いや、前書き変えないでください

なんやかんやで、氷野は寝た。そして、起きた。

で、いいだろ。

CH A o t e R 4

「氷野、本当に何も覚えてないのか？」

「はい、すみません」

普通に考えて真冬の公園で雪に埋もれている男などいるはず無いのだ。

無いのだが……。

「その以前は全く覚えていない……と？」

「はい」

「だりいーなー、おい。どうすんだよ」

銀時さんは思いつきり顔を歪めて新八さんを睨む。

「仕方ないですよ。根気よく探しましょう」

「だーからー、それがだりいっつつてんのー」

探す？

ダルイ？

あれ、話の方向性が掴めませんね？

「探すって何を探すんですか？ 何がだるいんですか？」

聞いてみると、二人は呆氣にとられた顔をしてから、薄らに笑った。
あ、馬鹿にしましたね。

「お前の家だよ。んな、立派な服着てんだ、みなしこ孤児って訳でもねえだろっ」

「そつ、そんな、いいですよ。怪我が治れば、直ぐにでも出て行くつもりです」

首をブンブンと振って遠慮の姿勢を示す。

だつて、そんなことしてもらつちやあお世話かけまくりじゃないですか。

「そんなのダメアル。それに、私たち『万事屋銀ちゃん』アルヨ。任せるネ」

「万事屋？」

「なんでも屋つて感じでやってるんです。ちやらんぼらんだけど、一応、仕事なんですよ」

「でつ、でも。僕、お金持つてないですし」

そう言うと、三人は途端に嫌あな笑みを浮かべた。

「気にするなアル。お前の、腰巾着の中にたんまり入つてた金を取つたから、大丈夫ネ」

「え」

神楽ちゃんが大声で叫ぶのを二人は慌てて嗜める。

「神楽、それは言つなつて言つただろ！」

「そうですよ、神楽ちゃん。せつかく、気づいてなかったのに」

「間違えたアル。ごめんヨ」

「あー」

「ま、まあ、まあ。気にすることア無えよ。ちゃんと見つけてやつから。金はもう無いけど」

……まじですか。

何か、僕、ヤバイ人に捕まっちゃったんじゃない？
誰か、助けてくだしあ。

chapter 5 (前書き)

なんやかんやで、僕は二日ほど眠り込んでしまった。

疲れていたわけではないが、まるで目覚めることを拒否していたように、僕は深い眠りに落ちていた。

何故だろう。

……ああ、分かった。

chapter 5

「ちょっと銀さん！ もう、四日連続、あんぱんじゃないですか！
一応、言っておきますけど、あんぱんは昼食にはなりえませんか
ら！」

「うつせー！ 嫌なら食うな、食うなら文句言うな。メガネは黙っ
てあんぱん食ってやがれ！」

「メガネ、関係ないですよ！ 大体、氷野さんから盗ったお金どう
したんですか！？」

「って、盗った宣言してるじゃないですか。」

「ぱつつあん、ごめんアルよ。定春の餌と、酢昆布とあんぱん買っ
たら無くなっちゃったネ」

「何で、あんぱんと酢昆布買ったよ！？ ていうか、何であんぱ
んオンリー？ 数ある中で何故あんぱん？」

「あ。あと、今月のジャンプも買った」

「知らねーよ！ ていうか、その金を食に当てるよ」

「ぱつつあん、それでも男か？ 男なら黙って出されたものを食い
やアいいんだよ」

全く、ドタバタと朝から騒がしい。

だから目覚めたくなかったのだ。君子危きになんやらかんやらって奴。

ふと、外を見ると朝にしては日差しが鋭い。

つて、？ あれ、もう昼じゃん。

そうか、彼らは昼食のことで揉めているのか、だなんて思いながら身体を起こす。

幾分か、痛みはマシになり、介抱無しで自由に歩行できるまでになつていた。

布団を退け、手っ取り早く片付ける。

ゆっくりと襖を開けると、三人の視線が僕に集まった。

「えーと、おはようございます」

「もう、昼アル。寝すぎネ」

「すいません」

「歩けるようになったんですね。身体、痛くないですか」

「大分よくなりました。どれもこれも皆さんのおかげです」

「そんな。昼ご飯……、あの……その」

「あんぱんですよね、寝室にまで聞こえてましたよ、その喧騒」

「ははは、じゃあ。どうぞ」

といて、あんぱんの入った袋を手渡される。

乱暴に開けて、一口齧ると、静かな甘みが口の中に広がった。

「おいしい」

「おうよ、『あんぱんのうまみを知らぬもの、この世に不必要なり』とは彼の聖徳太子が良く言ったものよ」

「いや、聞いたこと無いですから。噓、吹き込むのやめてください」

「飛鳥時代からあんぱんが存在していたなんて、あんぱんもつく

づく愛されたものですね」

「いや、あの、それはちょっと違……」

新八さんが複雑そうに苦笑して、銀時さんを睨みつける。

一方、銀時さんは悲しげに目を手で覆って、何度か頷きながら小さく呟いた。

「この子、アホの子だ……」

「ですね」

僕と神楽ちゃんだけが意味が分からなくてきょとんと首を傾げる。

「どうかしましたか？」

ていうか、

——このいたたまれない子を見るような二人の目は、何ですか？

chapter 5 (後書き)

テストなのであんまり書き込めない><
すみません

Chapter 6 (前書き)

「てゆうか、こんなペースで話ちゃんと進むんですか」

「心配無用だ、ぱつつあん。男には、進ませなければならねえときがあるアル」

「あ？あるある大辞典だ？」

「銀時さん、関係ないですよ、それ」

Chapter 6

更に、三日ほど経った日のことだった。

「といたしますか、何であれ僕はあなた方に料金を支払い、仕事を依頼したということなんですから、僕の身寄りを探してもらえると嬉しいんですが……」

「といたしますか、僕たちも色々切羽詰ってるんで、かわりに働いていただけると嬉しいんですが」

「え」

というわけで、すっかり回復した僕は彼らの為に働くことになってしまった。

僕はあまり欲が無く、彼らのように毎日あんぱんでも暴れだすことは無いため、労働は僕の利益にはならない。
むしろ、その要請は立派な迷惑だ。

「といたしますか、お断りしま……」

「といたしますか、既に依頼が入ってるからね。お断りとか無いからね。じゃっ、行くぞ。準備はいいか？」

「え、僕ですか」

「いつてらっしゃいアルヨ。出稼ぎ母さん」

「え、僕？ 母！？」

準備はいいか、と聞かれたが僕には心の準備がまったくできていない。

なのに、それを無視して銀時さんは僕の腕を強引に引っ張った。

嬉しそうに手を振る子供たちと白き悪魔、定春くんがあつとあくびをしたのが見ながら、僕は泣きながら引きずられていくのだった……。

*

「何で『といいますか』ネ？」

「さあ」

*

引きづられ……連れられて行ったのは、近所のファミリーレストランだった。

銀さんは意気揚々とパフェ各種を頼み、……ていうか金あるじゃん、僕にはコーヒー一杯を注文した。

「あの。依頼？ ……え？」

全く、状況が飲み込めない。

「ガキンチョの前じゃあ言いたいことも言えねえだろうよ。つつーワケで洗いざらい話してもらっぜ、氷野」

全てを見透かしたような目で彼は僕を見ていた。

僕はまるで射すくめられた獲物のように固まってしまっ。

「本当に何にも覚えていないんです」

「じゃあ。これは、何のために？」

そう静かに言いつつ、机のコトリと置いたハンドガンは確かに見覚えのあるものだった。

そして、それにはしっかりと“H i n o ・ M”と刻まれていた。

ああ、これは確かに。

「M 2 9」

「そうさ、しかも、」

といって、弾丸を手から二、三発落とす。

カラン、カラン。

無機質な音が僕の耳に響いた。

「4 4 マグナムときた。お前、そんな細い身体でこんなもん撃ちやがるのか？」

この銃は反動が強く、両手で持ち、反動を逃すように撃つ。

また、あくまでも対人用ではなく大型獣の狩猟用だ。

何であれ、僕のような子供が持つには危険すぎる代物だった。

「ですが、僕は銃の扱いに慣れていないはずですが……恐らくですが」
「ならいいんだがよ。てつきり、これで何発かやっちゃったのかと思っ
てよ」
「そんな」

コーヒーを飲み干す。

苦い。

苦い香りが口の中に広がる。

顔をしかめていると、銀時さんが笑いながら生クリームを僕の口に入れた。

甘い……のだろうか。

今はまだ、苦さの方が勝っている。

Chapter 7 (前書き)

「ごほっ、ごほごほっ」

突然、氷野はむせ出した。

どうした、と聞くと

「煙が……。僕、煙草苦手で…」

煙草？

「まさか——」

Chapter 7

気配を感じてふと横を見ると、黒い兵服のようなものを着た男がいた。

「おい、兄さんら、銃刀法違反って言葉知ってるか？ …… って、てめえ、万事屋の野郎じゃねえか！」

銀時さんの顔が青ざめていくのがはつきりと分かった。
苦手な人なのかな？

「いやー、土方くん。こんなとこまでご苦労様ー、つつーことでザリガニ釣りに行くんでここいらでお暇しまー……」

立ち上がって、逃げようとした銀時さんの袖を土方くんと呼ばれた黒服の男がしっかり掴む。

「逃がすかこの野郎。詳しい話は屯所のほうで聞かせてもらおうか、おら、そのチビもついてこい」

あ、僕がチビですか。

あごで促され、僕も席を立つ。

銀時さんは慌てて、食べ切れていないパフェのグラスとスプーンを手を取ったかと思うと、一気にかき込んだ。

「店員さん、代金は真選組のマヨラーにつけといてくださーい」
「何だっつ、てめっ」

土方さんの抵抗空しく、どうやらツケは真選組のマヨラーさんに回ったらしい。

一件落着ですかね？

そして、僕と銀時さんは土方さんの成すがままに引きずられていったのである。

っていうか、僕、引きずられてはつかじゃない？

パトカーの後部座席に投げ入れられ、僕たちはどこかに連行されるようだった。

その道中僕は、彼の名が土方十四郎であることと、彼こそが真選組のマヨラーさんであることを知った。

因みに、銀時さんと土方さんが異様に仲が悪い理由については触れられなかった。

また、彼が鬼の副長と称され、支える真選組は江戸最大の警察公安機関という。

あれ、すごい人に捕まっちゃった？

CHAPTER 8 (前書き)

二度あることは三度ある、三度あることは四度ある……って、それもう偶然じゃないですね？ 僕、変なやつにとっ捕まっちゃってばっかりで。

ニコチンにゴリラに天パにメガネ、大変アル。

CHAPTER 8

大きな武家屋敷であつた。

到底、殺人集団の集う場所とは思えないぐらいに綺麗であつた。とはいえ、何があるというわけでもなく殺風景でもあつた。

「おにーさん、おにーさん。あの、そろそろ放してくれませんか？」

銀時さんがおどけつつ、土方さんに嘆願した。

が、彼は一睨みしたかと思うと、啞え煙草の煙を口から吐き出した。

「げぼっげぼっ！」

思わず咽^{むせ}あがつていると、土方さんは少し罰の悪そうな顔をして、煙草を手に取り、庭先の池にポイと捨てた。

池には数匹の金魚と鯉が所狭しと泳いでいるのが、少し離れた渡り廊下でも十分に分かった。

「あ、ぽい捨てだ」

「お前が咽^{むせ}てやがるから捨てやっただよー！」

クールに見える彼が激昂して僕に文句を言う。
なんだ、この人は。

「独り言ですよ、気にしないでください。ただ、貴方の投げ入れた煙草で池の生態系は狂うんですよ」

「知るかアア！」

「ほーお、『江戸の平和を守っても、庭先の金魚は守らねえ』って訳か。さっすが、天下の真選組じゃねえか」

「何なんだよ！ そんなに悪いことか？ 俺が悪いのか！？」

途端に銀時さんVS土方さんの口喧嘩が始まる。
ありゃ、もしかして僕が火種かな。
しかし、さして気にせず、縁側に座りこむ。
ああーあ。お気に入りだった服が破れているよ。あんな力いっぱい引きずるから。

「おい、トシ。何を騒いでるんだ？」

声がして、瞬間、障子から男の顔がのぞいた。
この人、何かに似ている……。

「何でもねえよ、近藤さん」

取っ組み合いの喧嘩をしながら土方さんは答えた。
そんな場面だ。正直、何でもないはずがない。
近藤さんと呼ばれたその男は僕に歩み寄り、頭にポンと手を載せながら言った。

「こいつぁ、銀時の子か？」

子？ 僕が？ 確かに、記憶を無くし、年齢などはあやふやだが、一応は成人しているつもりだぞ。

「ちっ、違いますよう」

「トシ、何でコイツら連れてきたんだ？」

「だっ……てめっ……から、銃刀ほっ……う……違反……で……検挙し……
…たんだよ、何すんだてめー！！」

掴みあいの喧嘩を命がけでしているので、彼の言葉は途切れ途切れだった。

だが、近藤さんは十分理解したらしく、不思議そうな目で僕を見た。

「トシ、まさかこんな子どもが“奴”なはずないだろう」

「っそ……んなのっ……くっ、……わかんねえだろ……。あらゆる……可能せ……いを確かめて……いくしか……うらっ！……ねえよっ」

「ごめん、トシ、何言ってるのか全く分かん」

「うああ！」

さすがにラチがあかなそうだ。

僕は少しためらったが、銀時さんの体に後ろから抱きつき、無理やり土方さんから引き離す。

近藤さんも同じようにして土方さんを銀時さんから離していた。

「おい……っ……“奴”って何だア？」

吐息を漏らしながら、銀時さんは二人に聞いた。

そんなに疲れるなら程ほどでやめとけよ、二人とも。

「大体、おかしいとは思ってたんだよ、俺ア。たかが、ファミレスで銃いじくって遊んでただけで、鬼の副長じきじきに逮捕されるたア、そんなVIP待遇される覚えは無エよ」

「どうだか」

「何だと？」

「銀時さん！」「トシ！」

僕と近藤さんの二人でなだめる。

大変ねえ。

とりあえず、近藤さんが部屋に入るように促す。

寒い外と違って、中は十分に暖かった。

「まあ、お互い見知らぬ仲ってワケでもない。トシ、話してやってくれ」

土方さんは思い切り嫌そうな顔をして、語りだす。

そんなに言いたくないことですか。

と、思ったが、純粹に銀時さんがム力つくのだと悟った。

「今——」

そして、彼の口が開かれた。

CHAPTER 9 (前書き)

なんだろう、この人の声は僕の軸を流れる血を高ぶらせる……。

僕の大嫌いな煙草のような声だ。

CHAPTER 9

「江戸で銃器を取り扱うものは皆一様に厳しい取調べを受けている。……今、江戸各地で銃を使った殺人事件が多発していて、死者は現在、十五名に上らあ」

言葉を切つて、近藤さんの目をチラリと見た。彼は深く頷いて、代わりに続きを紡いだ。

「各々に何の関連性も無いことから、無差別殺人と思われるが、それにしてもあまりにも華麗すぎる犯行でな。被害者は皆、まるで、死の最後の瞬間まで綺麗に台本で用意されているかのような鮮やかな死に様なんだよ。ある者は胸のペンダントを撃ち抜かれ、辺りに広がった血の模様がペンダントの装飾部そっくりだったという。また、ある者は鮮血で薔薇を体中に描かれ、一発の弾丸がまるで薔薇の棘のように目から突き出ていたと言う。誕生日に殺された女はその歳の数だけ体を銃弾が貫き、忌み嫌われていた男は同じように撃ち殺された鳥が彼の死体を覆っていたと言う」

「常人のやるサマじゃねーな」

銀時さんは顔をしかめて言った。

「ああ。だから、俺たちとしても厳戒な包囲網を敷いて、これ以上の殺人を止めなければならねえ。まあ、てめえは木刀なんざぶらさげてっから疑っちゃんねえが、そのボウス！……お前さんにはいくばくか聞きてえことがある」

土方さんは忌々しげに、そして疑いに満ちた目で僕を睨みつけた。
ああ、疑われているのだ。
すぐにそう理解した。

僕は殺人なんて仰々しいことは出来ない……だろう……。

「そんな……、僕は」

記憶をなくし、自分の状況さえ分らないのだ。

そう言おうとして口を開くと、銀時さんがかぶせた。

「神楽たちが一週間ぐれえ前に傷だらけのコイツを拾ってきたんだがな、どうやら、記憶が無えらしい。まあ、ここ一週間は俺の家で寝てばよかったよ。まさか、こいつじゃあるめえよ」

「ここ一週間？ 一週間前？ そりゃあ、余計に怪しいな。この一ヶ月、二日明けずに殺人は繰り返されていた。だが、この一週間、ピタリと止まって、音沙汰無しだ。オイオイ、あんた、もしかして」

「まつ、待つてください。僕は銃の扱いなんて……」

「トシ……あまり、挑発するな」

近藤さんが彼の肩に手を置き、興奮気味の土方さんを宥める。

、が、さして効果は無かったようだ。

「今のアンタが知らんでも、前のアンタがよく知ってたかも知れねえよ。それに、記憶を無くしたってのも怪しいもんじゃねえか」

半信半疑、否違う。

全力をかけて、僕を疑っているのだ。

それは寧ろ確信に近いのかも知れない。
銀時さんも焦りの色を見せていた。

「氷野……、お前じゃないんだよね？」

「違います！」

間髪を入れず、叫ぶ。

だが、土方は身を乗り出し、僕の肩を捕まえた。

「証明は出来ねえ、でもやってねえ。そんなハナシは信用ならねえな」

銀時さんが僕に代わって反論する。

「違うつってんだ。何度も言わせんじゃねーよ」

「てめえがガキを庇うのは勝手だが、死んだ人間の思いはどうなる

……！」

「氷野を犯人だって決め付けて話進めてんじゃねーよ」

二人が声を荒げ、立ち上がった。

拳が振り上げられ、互いが互いに殴りかかろうとしていた、そのときだった。

「待ってください！！」

chapter 10 (前書き)

甘いと苦い、どっちが勝つ？

甘いと苦いは冷たいが御好き？ それとも生暖かく、赤あい……

声が響いた。

僕の声とは思えない、強い意志の籠った声だった。

二人の拳は僕の頭上で交差し、互いを傷つけることなく静止していた。

「氷野……？」

「僕は犯人じゃありません。ですが、疑われても仕方の無い状況であることは認めます」

土方さんが僕のほうへ向き直り、静かな声で言う。

「それは、自供ととっていいのか？」

「いえ」

それは、違う。

僕は人を殺してなどいない。

氷野百は殺人を犯していない。

今度ははっきりと言える。

だから。

「一週間……いえ、四日でいい。僕を真選組で監視して下さい。それはもう、生きることさえ困難な厳しいものでもいい。もし、その間に犯行が起きなければ、僕を犯人にして下さい。ですが、もし！もし、その間何も無ければ、僕の無実を認めてください！」

三人は圧倒されたかのように、目を丸くして僕を見ていた。
いや、僕の心のうちを見ていたのだろう。
僕は静かに土方さんの方へ銃を差し出す。

「預かってください」

彼は小さく頷いて、受け取った。

一瞬僕の方を見やった。瞬間だったが、その目は確かに「いいんだな？」と僕に問いかけていた。

僕はその目をしっかりと見据えた。
肯定の意だった。

「万事屋、いいな？」

「……………、ああ。それで、氷野の無実が証明されるなら」

力なく、銀時さんは頷いた。

そして、僕を「馬鹿なことを」といった目で見た。

僕は「大丈夫」と少し笑ってみせた。

「じゃあ、トシ。お前がこちらの——氷野くんと言ったかな、の面倒を見る。あと、他の隊士には知られんように気をつけてくれ」
「分かった。近藤さん」

銀時さんが呆然とした様子で立ち尽くしたのを後ろ目に立ち上がり
と同時に土方さんに腕を掴まれた。

それは、ここに連れて来られた時のような乱暴なものではなく、案外にも優しくかった。

部屋を出、僕は彼の背を追い、連れられるままに、また長い廊下を歩く。

果たして、僕の判断は正しかったのだろうか。

僕は限りなく黒に近い容疑者となったのである。

これを白と成すならば、僕は殺人鬼の次なる犯行を乞うしかないのだ。

歯がゆいだろう、だが、耐えるしかないのだ。

タイムリミットは四日間。

その間に僕は、何に願おうか。

神か？ 月か？ 日か？ 自分自身にか？

どうか、僕をお救いください。

僕は静かに君に乞う。

Chapter 11 (前書き)

にがいは、あまくなる？

ねえ、何でそんなに優しいの。

Chapter 11

“ 氏名 ^{ヒノ} 氷野百 ^{モモ} ”

性別 男

年齢 恐らく二十歳以上（便宜のため二十歳とする）

出身 不明（江戸では無い、恐らく地方）

生年月日 全く持って不明。雪の季節……恐らく冬か？

血液型 不明（自称、A。俺が見るにAB）

職業 無職

身長 百六十は無い

体重 自称、五十程度

罪状 銃刀法違反”

「じゃあ、これでいいな」

「あ、はい」

ということで、彼の自室に通され、簡略なプロフィールを書かされた……が、ところどころ彼の覚書の入っている非常に奇妙なモノが出来た。

なににせよ、僕にだって記憶が無い。推測だらけの、恐らくプロフィールだ。役に立つわけねえ。

「とりあえず、他の隊士には『銃撃術師範』として紹介する。お前もそのつもりで、な。まあ、たった四日間のことだよ」

彼は穏やかな口調でそういう。

彼の口にした、たった四日間という言葉が、それは四日間過ぎれば僕の無実が晴れ、その役柄を演じなくて済むということなのか、僕

は犯人と決定付けられ、死すためその必要が無いということの意味するのか、僕には分からなかった。だが、先程のような高圧的な疑いの眼差しが注がれることは無かった。

「はい、土方さん」

返事をする、彼は頭を掻きながら照れくさそうに言う。

「うーん、その呼び方は良くねえ。下の名前で呼んでくれ」
「はい？」

思わず素っ頓狂な声をあげて、僕は飛び上がった。

無論、彼がそんなことを言うような柄に見えなかったことも一つだが、僕と彼は『監視するもの』と『されるもの』の関係である。凡そであるが、そんな親しい仲はこの関係には最も邪魔なものであるだろう。

「なっ、何ですか」

「真選組は剣に長ける者の集まり……銃の師範ハンドガンなんざ求めちゃいねえよ。だから、俺の弟とすることになった。四日間の兄の職場見学つーわけだ」

「はあ」

「仮にも兄弟が『氷野』、『土方さん』だなんて、苗字で呼び合ってたちゃあ、奇怪千万だア。ああ、そうだ。これを渡しておこう」

そういつて、一枚の紙を渡された。

達筆な字で、細かに書かれているそれは僕が先程書いたのよりも厳密な、何者かのプロフィールだった。

「これは？」

「俺の弟としてのお前のプロフィールだ。よく、頭に叩き込んでおけ」

Chapter 12 (前書き)

僕を溶かすのは苦い苦い珈琲。

僕はシュガー

誰か、早く掻き混ぜて。
早く解けて消えたいの。

Chapter 12

氏名 ^{ヒジカタ} 土方 ^{ヒノ} 氷乃

「氷野（ひの）の方が名前なんですネ」
「俺の独断だ」

性別 男

「さすがにここは変えられねえな」
「変えんでいいです」

年齢 十六歳

「若くないですか？ 無理ですよ」
「万が一、酒を飲んであらぬことを口にしたらどうするつもりだ」

出身 土方家

「これ、出身って言うんですか」
「この件に関しては上手く誤魔化せ。あまり深入りさせるな」

生年月日 六月六日 生年は秘密

「秘密って」
「この件に関しても上手く誤魔化せ」

血液型 A型

「俺がA型だからな」
「ああ、でしょうね」

職業 銃撃術師範

「僕、撃てないですよ」
「誰も銃なんざ興味を示さねえさ」

「身長と体重は誤魔化せねえから、正直に言えよ」
「分かってます。サバなんて読みませんよ」

好きなもの マヨネーズ

「この欄重要ですか？」
「無論」

嫌いなもの 天パ 銀髪 甘党

「こんなに書くなら素直に名前を書けばいいじゃないですか」
「何であれ、名は出さん」

口調 荒っぽい

「適当ですね」
「とりあえず、敬語は禁止だな」

その他 兄に絶対服従すること。

「はいはい、分かってますよ。兄上様」
「おう」

と、読み上げたところで、僕は深い溜息をつく。
そんな僕を横目に土方さんは思い出したように言う。

「付け足しはその都度、耳打ちする。基本的に俺の傍を離れるな。
寝るときは俺の部屋の隣を使え。とにかく、容疑者ということを勘
取らせるな」

「何故です？」

途端に真剣な顔つきになって言う。

「被害者の中に、真選組の縁者がいるんだ。それに極悪卑劣な犯人
に恨みを持つている者なんて少なくねえ。俺だってその一人だ」

「じゃあ、土方さんは僕を殺そうにも、四日間指を咥えて待たねば
ならないと言うわけですね」

嫌味がましく言ってしまったのを恥じて顔が赤くなったのを感じた。
それを土方さんはさも面白そうに笑う。

「さつきは悪かった。実は犯行はてめえみたいなガキにア出来ねえ
んだ」

芝居だったのだ。

先程詰め寄ったのは、彼の小芝居だったのだ。

「ガキには出来ないって？」

「第八の犯行は三メートルはある木の幹の上に大の男の死体が吊る

されていたんだよ。女子どもには出来ねえ芸当だ」

思わず、落胆する。

というより複雑な心中だった。

「なら、僕はこんな賭けをしなかったのに」

「俺は理屈でアンタが犯人じゃないと思ったが、」

いいながら、声量を落とす。

「近藤さんの方はどうもそうはいかねえ。あの人は感情で考える。だから、お前が犯人だと思っているはずだよ」

「まさか」

あの、近藤さんが。

優しいそうな目に僕は彼は僕を信じていると思い込んでいた。だが、そうではないらしい。

「さっき言った、真選組の縁者つてのは近藤さんの甥なんだよ」

ならば、納得だ。

優しい男だからこそ、その意味の無い娯楽のための殺人に激昂しているのだ。

そして降って沸いたように現れた僕は見事に怪しい。

きつと、引き裂いても飽き足りないだろう。

人は見かけによらないというが、行動にもよらない。

荒々しいと思った男が意外に賢く暖かい。

そして、優しいそうだった男こそが僕を疑っていた。

ならば、僕が演じる土方氷乃もまた、周りの考えを裏切るのだろうか。

CHAPTER 13 (前書き)

思案を巡らさねばならぬ。

僕は誰だ。

土方さん、いや、トシ兄さんの話を要約するところだ。

その一、これより四日間、僕は土方さんの四つ下の弟、土方氷乃を演ずること。

その二、これより四日間、銃撃術師範ではあるが、隊士（特に沖田総悟）との接触は避けること。

その三、これより四日間、常時、土方さんのもとを離れないこと。

その四、これより四日間、万事屋との接触は厳禁であること。

その五、これより四日間、記憶を取り戻すことに励むこと

「って感じですかね」

「オウ。まあ、四日間無事に生きてるよ」

「はいはい。穏やかな余生を存分に過ごしますよ」

という感じで打ち合わせは終わりである。

襖の隙間からチラリと外を見やれば既に日が落ちようとしていた。なんやかんやで数時間彼と話していたことになる。

「にしても、物分かりがいいねエ。総悟もこうだったらいんだが」

「トシ兄さんも銀時さんも忘れがちですけど、僕これでも記憶喪失っ子なんですよ。正直、今なら何言われても『そうかもしれない』」

って思っちゃいます。何でも適応できます。ドンと来いですよ」

「そらアいい。だが、犯人か、と問われて『そうかもしれない』だア、言うなよ」

「分かってます」

思わず拗ねた様に口を尖らせて言ったのを見てトシ兄さんは笑った。そして、立ち上がる。

「じゃあ、明日紹介するから、とりあえず今日は俺の部屋に隠れとけ」

「あ、はい」

徐に部屋を出ると、彼は僕と外の世界を遮断するかのように鋭い音を立てながら、襖を閉めた。

それに、寂しさと安心の入り混じった不思議な感情を覚えながら、僕は畳に寝転がった。

さあ、考えよう。

今の僕に出来ることは考えることだ。

ほら、思い出すんだ。

あの、奇妙な眠りの瞬間を。

何故僕は、雪に埋もれていた？

何故僕は、体中を怪我していた？

何故僕は、銃を携帯している？

分らない。

いや、思い出せ。

僕は誰だ？

僕は本当に……氷野百なのか？

Chapter 14 (前書き)

さあ、お前を流れる血は何色だ？

冷ややかなその肉体に人の血は流れているのか？

Chapter 14

走っている。

走って、走って、走って。

いくあてもなく走っている。

逃げなければ！

追われているのだ、僕は何者かに追われている。

手には銃が握られている。

これは僕のものなのだろうか。

それに、何なのだ。

さっきから僕を滴るこの生暖かい紅いものは。

え？

血だ！

血を滴らせ走っているのだ。

おい、待てよ。

待ってくれよ。

僕、痛くないよ。

怪我なんてしてないよ。

ねえ、痛くないんだって！

誰の血だよ！

手が震える、足がちゃんと動かない、こけそうになる、こけても這いずって、僕は行かねばならぬ場所がある。

殺シテやる！コロシテヤル！殺シテヤル！殺シテヤル！

頭の中に響く声を誰か止めてくれ。

ああ、もう。

駄目かもしれない。

手が、手が、引き金に。
撃っちゃう。

「殺ス」

ガウン！

鈍い音が響いて、僕はまた誰かの血をかぶる。
ああ、生暖かい。

.....

.....

...

「!」

いつのまにか寝てしまっていたのだが、
どうやら僕は目覚めたらしい。

正しくは悪夢から解放されたというべきか。

汗が僕を伝い、それを見て思わず血ではないかと連想してしまう。

何だ？ 今の夢は。

僕の脳裏にこびりついて離れようとしない気味の悪い夢。

あの時、銃を撃ったのは……紛れも無い、僕だ。

僕は一体何を撃ったんだ!?

恐怖と不安で叫びだしそうになるのを必死でこらえる。

心が捻りきれそうになる、血が沸き立つ、疑心に囚われる、途端悶え出す。

「どうしやしたア？ 随分、汗かいてまさア」

声がした。

その男は丸まって泣いていた僕を見下ろすかのように立っていた。

chapter 15 (前書き)

悪魔が天より光臨す？

「だっ、誰だ!？」

大きく飛び上がって、僕は銃を構える……振りをする。

実際にはその両手には銃は携えられてはおらず、なんとも不恰好であつた。

男はそれを不思議そうに、そして愉快そうに見ていたので、何故か無性に腹が立つた。

思わず顔をしかめ、鬼の形相をして彼を睨みつけていたのだろう。

「何でイ、昼寝を邪魔して悪かつたねイ」

少し動揺した顔で彼は言ったので、僕は思わず拍子抜けする。
仮想の銃を構えた両手は即座に宙を掻く。

「あ……いや。僕の方こそごめんなさい」

「へえ。土方さんが弟を呼んだという話を聞いていたんだが、 안타かい?」

「え……えーと」

そつだ、そういう話になっているのだ。

「ええ。僕が土方十四郎の弟の土方氷乃です」

少し芝居がかった言い方だったが、彼は納得したようだった。

「えーと、あなたは？」

「沖田総悟。現、一番隊隊長。次期、真選組副長でイ」

あれ、副長は土方さんのはず。
もうすぐ辞めてしまうのか？

「はあ、お若いのにすごいですねえ」

「そりゃどうも」

沖田さんという方は苦労人だな。

さっきは驚かせてしまった。

いやあ、お恥ずかしい。

にしても。

「あの。沖田さん、何で、この部屋に？」

ここは土方さんの部屋である。

彼の話によると、ここには足を踏み入れるものはほとんど居ないという話なのだが。無論、だからこそ僕の隠れ場所に選ばれたのだが。

「いや、土方さん殺すために罠でも仕掛けておこうかと思ったんで
エ」

「……………はいつ！？」

こんの小悪魔は愛くるしい顔して何てコトを言っんだ。

冗談ですよー？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5463f/>

銀魂 —the Gunner in reds—

2011年1月18日03時40分発行